

平成30年度 がん教育総合支援事業 がん教育推進校実践報告

テーマ「がん患者への理解と共生」

学校名：北海道小樽潮陵高等学校

1 はじめに

本校においては、これまで教科「保健体育」の科目「保健」の生活習慣病に関わる単元において、日本人の大きな死亡原因となっている代表的な生活習慣病の一つとしてその特徴等について指導してきた。また、小樽市のがんに対する取組について確認するとともに、グループワークにより、がん患者の生活の質の維持・向上について理解を深める取組を行ってきた。

日本人の死因の第1位であり、生涯のうちのがんにかかる可能性が2人に1人であるという現状を踏まえ、がんの予防や早期発見等について正しい知識を身に付け、自らの健康の保持増進を実践的に進めることができるようにするとともに、検診の受診率の向上など社会的な対策について主体的に考え、実践していこうとする態度を育成したい。また、がん向き合う人の声を直接聞かせることにより、自他の健康と命の大切さについて学びを深め、自己の在り方や生き方について改めて考え、がん患者やその家族と共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図るため、本事業の実施を希望した。

2 実践内容について

- 平成30年5月
保健授業「がんの特徴や小樽市における取組等」
- 平成30年8月29日
保健体育科における教科研修「がん教育推進の検討」
- 平成30年10月
保健授業「がんの原因や早期発見の重要性等」
生徒向け事前アンケート（対象：第1学年）
- 平成30年10月29日
生徒向け講話（がん経験者の講話）
医療系進学希望者向け講話（がん専門医による講話）
- 平成30年11月
保健授業「がんの問題に対する方策の検討」
生徒向け事後アンケート（対象：第1学年）
- 平成30年12月4日
保健体育科における教科研修「がん教育研修会の内容の周知」

3 がん経験者による生徒向け講話について

北海道がんセンター がん相談支援情報室
ピアサポーター 滝澤 ひとみ 氏

演題「正しいがんの知識を」

がん経験者の講話を聞き、自他の健康と命の大切さについて学びを深めることを



目的として実施した。

<主な内容>

- がんのしくみや進行、自覚症状
- がん検診の受診率
- 3つのC（Cancer、not Catchy、not Caused）
- 家族への伝え方
- 支えとなった出来事
- がん患者としての生活やさまざまなチャレンジ
- キャンサーギフト＝がんがくれた贈り物
- どう生きていくか



4 がん専門医による医療系進学希望者向け講話について

札幌医科大学 医学部 分子生物学講座

教授 鈴木 拓 氏

演題「がんという病気を知る～その病態、診断と治療～」

がん向き合う医療関係者の講話を聞き、がんに関わる医療の在り方について理解を深めることを目的として実施した。



<主な内容>

- 各種がんの種類や原因について
- ・肝臓がんについて
- ・血液のがん（白血病）について

- ・食道・胃・大腸がん・肺がんについて
- ・がんのステージについて
- 各種検査方法について
 - ・画像検査（エコー、CT、MRI）
 - ・内視鏡検査（胃カメラ、大腸カメラ）
- 各種治療方法について
 - ・抗がん剤
 - ・手術（開腹・内視鏡）

5 生徒対象アンケート結果について

＜事前、事後の比較＞

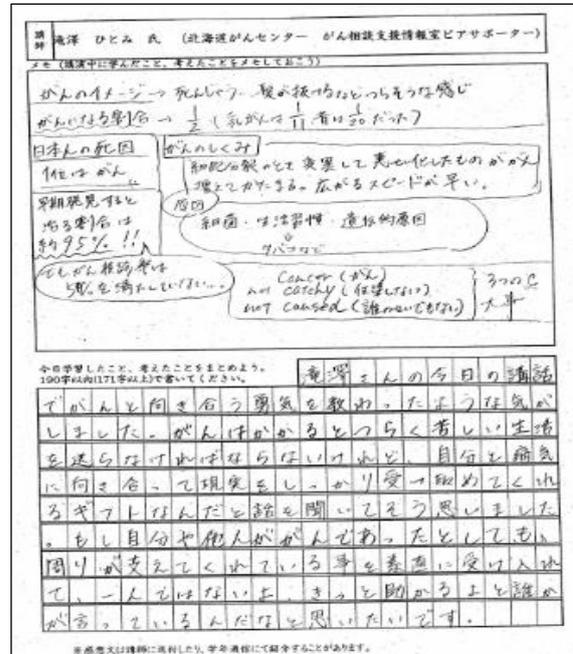
- ・「がんは誰もがかかる可能性のある病気である」という設問に対して正しいと回答した割合
99.1%→100%
- ・「早期発見すれば、がんは治りやすい」という設問に対して正しいと回答した割合
96.5%→100%
- ・「がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う」という設問に対する肯定的回答の割合
91.3%→96.2%
- ・「がんになっても生活の質を高めることができる」という設問に対する肯定的回答の割合
73.0%→90.2%

6 実践の成果について

- ① 1学年の生徒を対象とした、がんを理解するとともにがん患者と共生していく視点を育成する取組
 - ・保健の授業とがん経験者の講話を関連付けて実施したことにより、がんは誰もがかかる可能性があることや、早期発見によりがんの多くは治るということすべての生徒が正しく理解すると同時に、早期発見にはがん検診が重要であるが、我が国においては検診の受診率が低い現状にあることについて理解し、検診を受けようと思う生徒の割合が増加した。
 - ・がん経験者の体験を直接聞く機会を設定したことにより、がん患者にとっては主治医や看護師など医療職との信頼関係や、ともがんと闘う仲間の存在が重要であることなどについて理解するとともに、がん患者の生活の質を高めることに対する意識が向上するなど、がん患者やその闘病を支える家族や医療関係者への理解が深まった。



（保健の授業の様子：グループワーク）



（講話を聞いた生徒のレポート）

② 医進類型指定校としての特色ある取組

- ・がん専門医による講話を実施し、専門的な知見に基づく説明を受けたことにより、各種がんの特徴や原因、検査方法等について理解を深めるとともに、がんの場所や種類、ステージ等により選択できる治療方法が異なることや、最新の治療方法など、実際の医療の現場における仕事のイメージをつかむことができ、生徒の医療職を目指すモチベーションが向上した。

7 今後の課題

- ・がんやがん患者の生活に対する知識はかなり定着したと考えられるが、がんと健康について、身近な家族と語り合うことに対して否定的な回答をしている生徒が、取組後も一定数（16.6%）いることから、保健の授業だけではなく、養護教諭と連携して保健だよりを発行するなどして、がんの問題を身近な問題として捉え、自他の健康と命の大切さについて学びを深める活動を継続していく必要がある。
- ・がん教育については、本校ではこれまで保健の授業の中で取り扱ってきたが、今回のように授業と講話を組み合わせるがん教育を行う場合、保健の授業だけでは指導時間の確保が困難であることから、今後は、保健の指導内容の精選を進めて指導時間の確保に努めることはもとより、学校全体で推進する健康教育の一環として、LHR や行事の時間を活用することも視野に入れて、取組を進めていく必要がある。